

研究計画書（学部名）

研究課題	<div style="text-align: right; font-weight: bold; margin-bottom: 5px;">ウヴェ リヒタ</div> コミュニケーションの教育法に関する実践的研究
研究期間 (最長3年)	平成 20 年度 ～ 平成 22 年度
研究の概要（120字程度） 実践的な英語教育法によって学生の英語によるコミュニケーション能力の向上を目指す。	
中期計画における位置づけ 「教育の成果に関する目標を達成するための措置」として、教養教育の充実のための諸施策を多様な方法で実施していく、としている。また、「教育理念等に応じた教育課程を編成するための具体的方策」として、学生が自ら問題を発見し、主体的に解決する指導方法の開発と実践を推進する、としている。さらに、「学生への支援に関する目標を達成するための措置」として、1年次から学年進行に応じて、個別の教育指導ができる体制をいっそう充実させる、としている。	
研究の目的 ①研究の背景 日本の学生の能力は「読む」力はあるが、「聞く」「話す」「書く」力が足りない。この授業によって、この3つの力を強くする訓練を行いたい。	
②研究の目標 この授業によって、「聞く」「話す」「書く」力を強くする。	
③期待される効果 参加した学生が、この授業によって、積極的に英語を話すことができるようになること。また、東アジアとアメリカの文化を理解して、それを英語で説明する力を養うこと。 三沢の米軍の高校生との交流を行うことによって、自分の文化を発信して、アメリカの文化を学ぶ。	

研究の計画

①研究の優位性・独創性・新規性

優位性：外国人との交流によって英語を学ぶ。

独創性：一時的な日本への観光客などではなく、日本に定住し、日本の文化を深く学ぼうとするアメリカの若者と交流し、社会生活などの問題を取り上げ、意見交換を行う場となる。

新規性：今まで、日本の大学であまり行われなかった活動となる。

この活動が成功することによって、大学の大きなPRとなりうる。

②研究の実施方法・取組

1年目：さまざまな教材（指導方法）を基にした、実験的な試行によって、経験と情報を得る。

（学生にとって最もふさわしい時間帯…学生の授業量、アルバイトの有無、週末の予定などによって判断する。）

作文、会話、映画によるアジアの文化の学習という3つの主な活動の中、どれが最も学生に求められた分野か判断する。

平成20年度8月後半にサマーコースを実施。

試行の結果を評価する。

2年目：場合によっては、参加者を増やし、プログラムを改良し、誰でも実行可能な一定のプログラムを形作る。

結果を評価する。

3年目：最終的なプログラムを作成し、今後の将来のこのプログラムの役割を考える。

記載注意 各欄は、適宜拡大、縮小し、A4、5ページ以内としてください。